

わがまま発表大会

まはら 三桃 (児童文学作家)

「じゃあいっそ、わがまま発表大会はどうですか」

中原くんが言って、教室はしんと静まった。

学級会の時間。みんなでお楽しみ会の出し物を決めていた。私たちのクラスは学期の最後にお楽しみ会をやる。一学期は歌のステージ、二学期はお笑い大会をやった。どちらも楽しかったけど、今回はぜんぜん決まらなかった。

「ダンス大会」

「苦手です」

「マジックショー」

「ムゥリィイ」

「ダジャレ大会」

「つままないよ、航くん」

てんてに出されるアイディアには、ヤジがとんだり、クレームがついたりする。

「静かにしてください」

「人が話しているときは聞きましょう」

司会の中原くんは何度も注意したけれど、みんなは好き勝手な意見を言うばかり。顔をしかめてそんなみんなを見ていた中原くんは、やがて大きな声で言ったのだった。

「じゃあいっそ、わがまま発表大会はどうですか」

私はちよつとびっくりした。だって中原くんはとても真面目だから。忘れ物はないし、ふざけたり騒いだりもしない。わがままとは真逆のキャラクターだ。

きよんとしているみんなに向かって、中原くんは続けた。

「ふだんみんながこうだったらいいとか、これは嫌だなと思ってることを自由に発表するんです」

「そんなことならたくさんあるよ」

紗季ちゃんが言うと、みんなも大いにうなずいた。

「じゃあさ、いちばんいいわがママを言った人が優勝にしようぜ。」

優斗くんが言った。いつも強気な優斗くんは、わがママにも自信があるのだろうけど、みんなも乗り気になった。

「それって、ちょっとおもしろそう。」

そんなわけで、今回のお楽しみ会はわがママを発表することに決まった。

発表大会当日。発表にあたっては、中原くんが一つだけルールを提案した。

「人の発表に反対したり、ヤジを飛ばしたりはしないようにしてください。」

まず手をあげたのは、冴ちゃんだった。冴ちゃんはいつも自分の意見をはっきり言う。

「私は早起きが苦手なので、一時間目をなくしてほしいです。」

きっぱり言う、

「サンセー。」

声が上がった。冴ちゃんはにっこり笑って着席した。

言ったことが認められると嬉しいよね。

思っていると、昇太くんが立ち上がった。

「ぼくは、スマホを持ってきたいです。緊急のときにいいと思う。」

するとすかさず、反対意見が出た。

「それはよくないです。授業中に使う人がいるかもしれないし、持っていない人もいるから不公平です。第一うっかり誰かが壊したら、大問題です。」

矢継ぎ早に言ったのは南ちゃん。南ちゃんの言うことはいつも正しいけれど、今回のルールは破っている。

「反対意見はダメだぞー。」

優斗くんに言われて、南ちゃんは肩をすくめた。

次に康太くんが発表した。

「ぼくは運動会をなくしてほしいです。」

「ぶりだからな。」

優斗くんが言うと、南ちゃんが反撃した。

「ヤジもダメ。」

すると凜ちゃんから声が上がった。

「私はあったほうがいいと思う。だって、楽しいもん。」

凜ちゃんは足が速い。

そうか。同じことでもみんなが楽しいとは限らないよね。

納得していると、吉元さんが手をあげた。

「私は給食について、言いたいことがあります。残るのはもったいないので、食べきれ分だけ取るようにしたらいいと思います。」

「それはいいと思います。」

給食委員の宗くんが賛成した。

「食べられないものは、自分にしか分からないから、セルフスタイルがいいよね。」
アレルギーとかあるしね。

思っていると優斗くんが、立ち上がった。

「おれは『おれファースト』でいきたいです。何でもおれが優先、おれの言うことは絶対。」

大きな声で言い放った。ヤジもクレームも禁止だから仕方がないけど、教室の空気はピリツとした。私の胸もざわざわした。

けれど優斗くんは満足そうで、

「優勝はおれだな。はっはっは。」

なんて高笑いしている。

ますます空気が重くなったとき、航くんが待ってましたとばかりにこう言った。

「そりやまだ分からん、知らん、なっちよらん。」

「ぶっはっは。」

みんなはとたんに笑い出し、つられて私もふき出した。

すると名前を呼ばれた。

「山下さんは何かありますか?。」

「え?。」

中原くんと目が合った。

どくん、と胸が一つ打つ。みんなの前で発表することが、私はとても苦手なのだ。授業中も質問されると、それだけで顔が赤くなって泣きそうになる。

でも……。今日ならできるかも。

私は、おずおずと立ち上がった。そして思い切って言ってみた。その思いを。

30 25 20 15 10 5

「わ……私は、みんなの前で発表をしたくないです。」

言い終わったら、足ががくがく震えた。でも、何人かの人があなずいてくれた。
「緊張するよね。」

「何ならぼくもしたくない。」

賛成する声も聞こえる。顔があつと熱くなったけど、泣きたい気分ではなかった。パンケーキみたいにつくらした気分だ。

席に座ると、中原くんが言った。

「では、ぼくも発表します。」

私ははつと背筋を直す。

中原くんのわがままって何だろう。

私は全神経を耳に集めて、言葉を待った。

まはら 三桃（まはら みと）

一九六六年、福岡県生まれ。「オールドモーブな夜だから」で講談社児童文学新人賞佳作
に入選（『カラフルな闇』（講談社 二〇〇六年）と改題して刊行）。『鉄のしづきがはねる』
（講談社 二〇一二年）で坪田譲治文学賞、JBBY賞を受賞。ほかの著書に『なみだの
穴』（小峰書店 二〇一四年）、『奮闘するたすく』（講談社 二〇一七年）、など多数。

